

主 文
本件上告はいずれもこれを棄却する。
理 由

被告人A及び被告人B、C二名の辯護人野口政次郎の上告論旨はそれぐ末尾添付の各上

告趣意書記載のとおりであつて、これに對し當裁判所は次のように判斷をする。

被告人A上告趣意書について

所論のごとく假りに被告人が有毒飲食物等取締令を知らなかつたとしても、法の不知は犯意を阻却するものでないから、そのために、被告人に犯意なしというを得ないのみならず、原審の認定したのは、被告人に故意があつたというのではなく、被告人は必要なる注意を怠つてメタノールの濃度約百パーセントの工業用アルコール〈要旨第一〉を飲用に供する目的で他に販賣したという、有毒飲食物取締令第一條第二項違反の罪であるが、同令第一條は、〈要旨第一〉メタノールが人の生命身體に害毒を及ぼすおそれがあるので、その性能に着目して、これが處分などを取締る趣旨であつて、その違反罪が成立するためには、買受人その他においてその飲用によつて現實に害毒を受けたことを必要としないものであるから、この點に關し所論のような事情があるとしても、被告人が責任を免れるを得ないのはもちろんである。また、被告人において、現今アルコールにはメタノールを多量に含有するものがあり、その飲用によつて生命身體に危険を來すおそれがあることを認識しておつたこと原判示のごとくである以上、これが販賣に當つては、原判示のような注意義務のあるのは當然であつて、敢えてこれを命じた法令〈要旨第二〉の存在を必要とするものではないというべく、右の危険はこれを飲食するものの體質あるいはこれに混合する〈要旨第二〉水の量等によつて異なることあるべきは自明の理であるから、單に被告人自らこれを飲用して異状がなかつたという一事をもつて、前示注意義務を盡したものであるというを得べきではない。

さらに原審の科刑が重きに失するとの所論については、これをもつて上告の理由となし得ないことは日本國憲法の施行に伴う刑事訴訟法の應急的措置に関する法律第十三條第二項によつて明かであるから、論旨はすべて理由がない。

被告人B、同C辯護人野口政治郎上告趣意書第一點について

有毒飲食物等取締令第四條第一項は、論旨摘示のように規定しているのであるから、その規定自體から見て所論のごとく故意犯の場合は懲役刑に、また過失犯の場合は罰金刑に處すべきものであるとは到底解することは〈要旨第三〉できない。要するに、右規定の趣意は故意犯だと過失犯だとを問わず、懲役または罰金に處するを得べき〈要旨第三〉ものであつて、そのいずれにするかは裁判所の選擇に委したるものと解すべきである。論旨は理由がない。

同第四點について

〈要旨第四〉有毒飲食物等取締令第一條第一項は所定量以上のメタノールを含有する飲食物の販賣などを禁ずるに對し、同〈要旨第四〉條第二項は本來飲食物でないものにして、いやしくもメタノールを含有する以上これを飲食に供する目的をもつて販賣などをすることを禁じている趣旨と解すべきであつて、そのかかる區別をなしたゆえんのものは、本來飲食物でないものは、いやしくもメタノールを含有する以上、これを飲食に供することによつて生命身體に危害を及ぼすおそれがあるからである。

原判示によれば被告人等は、いずれもメタノールを含有する工業用アルコールを飲食に供する目的をもつて販賣したものであるというのであつて、工業用アルコールは本來飲食物でないのはもちろんであるから、原判決が、この事實に對して右取締令第一條第二項を適用したのは正當であつて、論旨は理由がない。（その他の判決理由は省略する。）

（裁判長判事 荻野益三郎 判事 大野美稻 判事 大島京一郎）